

## 陸上自衛隊の新隊員教育

大部屋の効用

理事長 富澤 暉

元自衛官たちの多くが新隊員教育課程に深い思い出を持つ。今ではその前期を「自衛官候補生課程」といい、後期を「新隊員特技課程」という。前者は「隊員としての資質を養うとともに、各職種共通の基礎的な知識・技能を習得させる」ものであり後者は「陸士としての資質を養うとともに、陸士としての必要な基本的な特技を習得させる」ものである。

その両教育を通じて養うべき、隊員・陸士としての「資質」のうち、最も大事なものは何であろうか。それは「団体生活をし、団体行動をとる能力」である。何故なら自衛隊は時代がどう変わろうと、与えられた任務を「隊」というグループ（団体）によつて達成するものだからである。

そのため何よりも大切なことは、出身（土地・家庭・学校等）を異にする様々な若者たちを一切の差別なしに大部屋で生活させることである。そこでは色々なトラブルが起こり、各人が「人間とは、常に被害者であり、同時に加害者である」ということを自ずと知る。この「こった煮」のような団体

生活の中で彼らは、他人と折り合つて生きて行く能力、つまり社会性を身につけていくのである。

教官たちは、一人一人に週番または日番としてリーダー役を担当させて、リーダーとしての責任感を体験させる。そしてそのリーダーの号令の下で足並みが揃った時の全員の快感を体得させて、リーダーシップとフォロワーシップの重要さを教えるのである。

また、グループ同士の対抗競技等を通じ、それぞれの団体としての成果を競わせる。団体競技で勝つためには能力の低い者を、皆で助けて誘導し、彼女（彼女）の向上がチーム力向上に繋がることを認識しあう。そして、その成果が出た時に全員で喜びを分かち合う。これが部隊における団結・規律・士気の基盤となる。

少子化時代の新隊員は入隊前まで一人部屋で生活していた。その彼らがこの大部屋生活で、社会人としての苦しみとそれを超克した時の喜びを初めて知る。この自衛官たちは、日本中の同年の人たちに比し、社会人としては明らかに優れていると我々は自慢に思う。

災害派遣やPKO、諸外国軍との共同訓練等で後輩たちが活躍しているのは、この「仲間意識」仲間を裏切らない誠実さ「自衛官としての誇り」があるからだ、と信じている。